

お礼の挨拶は二度が望ましい

5月には運動部の大会が目白押しだ。3年生の最後の大会もある。5月8日にコロナが感染症5類に引き下げられ、3、4年ぶりに元の形での開催に踏み切った競技団体が多いようだ。私は時間が許す限り、また競技団体の規制がない限り会場に足を運ぶようにしている。日頃の成果を発揮しようとする君たちの活躍がまぶしい。勝って喜ぶ姿、負けて悔しがる姿、全てがまぶしい。選手となって試合に挑む者、選手では出られなかったが裏方としてチームのために走り回る者、全てがまぶしい。考えてみれば、試合ができることが当たり前ではないということ。コロナ禍で教えられたのも君たちだ。幸い今年は試合ができる。勝っても負けても試合ができたのだ。勝って努力が報われたと自信を得ることも、負けて悔しさを胸に刻み付けることも、全てが君たち一人ひとりの成長の糧になっている。経験した者にしか与えられない充実感が、君たち一人ひとりの生きる支えになる。それほど高校で部活動に取り組む意味は大きい。たとえ大会で1勝もできなくても、これまでに流した汗と涙が消えてしまうことはない。共に一つのことに必死に取り組んだ仲間は、一生ものだ。大切にしたい。

各競技の大会は、様々な方々の努力によって成立している。試合会場、大会役員、審判、顧問の先生方、応援してくれる家族・友人、移動の際の交通機関の方々……。どれが欠けても大会は成立しない。感謝の気持ちを持って大会に臨みたい。

感謝と言えば、大会の後の次の登校日にちゃんと「応援ありがとうございました」とお礼を言いに来る選手が増えた。本人がそういうことが大切だと気付くこともあるだろうし、顧問の先生や保護者の方がその辺りをご指導なさっていることもあるだろう。でも、それをちゃんと実行できるところが素晴らしいし、そういうことが大切だと教えてくれる大人の存在もうれしい。

私も先輩から教わったことがある。「お礼は、その時とその次にあった時に二度するといい。ちゃんとそのことを覚えてくれていると思ってもらえるから」例えば社会に出て先輩に食事をごちそうになった時、帰り際に「今日はごちそうさまでした」次に会った時に「先日はごちそうさまでした」と2回伝える。そうすると、「こんなに覚えてくれているんだったら、また次も誘おう」と思ってもらえる。そうすると、かわいがってもらえるし、チャンスが広がる。ありがたいと思っても、伝えなければ伝わらない。それが「思い」ではなく「思い遣り」なのだ。お礼の挨拶は二度が望ましい。

挨拶の「あ・い・さ・つ」

新たに1年生が入ってきたので、毎年伝え続けていることを改めて……。

あ：明るく、い：いつも、さ：先に、つ：つづける

これが挨拶の「あ・い・さ・つ」だ。相手の眼を見て、口角をあげて、笑顔で挨拶することで、自分の気持ちが上がり、相手も清々しい気持ちになる。何より相手から話しかけてもらいやすくなる。話しかけてもらいやすいということは、チャンスが増えるということだ。人はヒト・モノ・コトとの出会いによって成長する。そのチャンスが増えるということは、成長のチャンスも増えるということに他ならない。

2・3年生はこれまでにそういう挨拶をする学校文化を育ててきた。「挨拶日本一」というのは、「自分から爽やかな挨拶をしようとしている人の割合を100%にしよう」という取り組みで、それが100%なら、日本一と言ってもいいだろうという意味だ。誰かと比べてではなく、自分たちの中でそれを100%にするように成長するというのが肝心だ。「他者との比較ではなく、過去の自分からの成長」だ。

黒田官兵衛の水五訓Ⅴ

水五訓その五「洋々として大洋を充たし発しては蒸気となり雲となり雨となり 雪と変じ霰（あられ）と化し凝（ぎょう）しては玲瓏（れいろう）たる鏡となりたえるも其（その）性を失はざるは水なり」：

水は温度によって形を変える（気体：蒸気・雲、液体：水、固体：雪・氷）し、器の形によっても形を変える。丸い入れ物では丸く、四角い入れ物の中では四角くなる。ただしその本質は一切変化しない。我々人間もまた、変化に対して柔軟に対応しつつも本質を忘れないようにすることが求められる。

一方、唐の詩人白居易の『偶吟』には「無情水任方圓器 不繫舟隨去住風」（情無き水は方圓の器に任せ、繫がれざる舟は去住の風に随う）という一節がある。「情のない水は容器の形に合わせた形になり、岸に繫がれない船は行きかう風に翻弄される。」人は、交友・環境次第で善にも悪にも感化されるというたとえにも使われる。